日蓮の教え

湯田　豊

我が国の仏教思想史において、日蓮の果たす役割は決定的に重要である。道元あるいは親鸞と比較して、日蓮は彼らに少しも遜色がない。しかるに、日蓮の教えのエッセンスを簡明に、しかも、適切に、われわれに説明する書物が存在しない――そのように、わたくしは感じる。日本宗教史において日蓮の教えが扱われていても、日蓮の教えがその深みにおいて論じられている書物は存在するであろうか？　しかしながら、日本宗教史の中に、日蓮の教えをコンサイスに、しかも深い洞察力を以て解説した書物は存在するかも知れない。H・ベッヒェルトおよびR・ゴンブリヒによって刊行されたDie Welt des Buddhismus〔1984〕の中に、日本における仏教に関する、精選された文献目録がある。そして、『仏教の世界』を編集・刊行した二人の世界的な仏教学者は、ヴィルヘルム・グンデルトのJapanische Religionsgeschichte〔Stuttgart 1943〕を、幾冊かの他の書物と共に推奨している。グンデルトの『日本宗教史』は、彼が東京に滞在していた時に、一九三五年に出版された。わたくしが読んだのは、一九三五年に出版された、彼の『日本宗教史』である。この書物において、グンデルトは、日蓮に関して、1．古い宗派の反応、2．日蓮聖人、3．日蓮の教えについてスケッチしている。わたくしによって、この論文において論じられるのは、3．日蓮の教えの一部分だけである。3．日蓮の教えは、全部で、3頁に過ぎない。

わずか3頁に過ぎない紙数の枠内で、グンデルトは、日蓮のエッセンスを、われわれに平易に解説している。グンデルトの『日本宗教史』が出版されたのは、今から71年以上も前であるけれども、彼によって扱われている〝日蓮の教え〟は極めて魅力的である。学界において話題になるのは、恐らく、J. M. Kitagawa, Religion in Japanese history (1966)、およびH. Nakamura, History of the development of Japanese thought, Vols. 1-2 (1969) であろう。グンデルトの『日本宗教史』は、多くの人の目に触れることはないであろう。この機会に、わたくしはグンデルトの『日本宗教史』の

中の第3のセクション〝日蓮の教え〟について、ほんの少しだけ批判的にコメントしたいと思う。そうすることによって、日蓮の教えが何か、について、わたくしなりに解釈したいと思う。ちなみに、わたくしは〝日蓮聖人〟と書いたけれども、日独文化研究所の所長であったグンデルトは、索引にNichiren Shonin 日蓮上人と記している。今と昔、標記は、変わっているけれども、わたくしによって扱われるのは、聖なる人、日蓮自身の教えである。

I．日蓮の教え

グンデルトは古い天台の教えを日蓮の法華経の教えと対比させ、次のように書いている――

古い天台の教えが、人間として現われたブッダの教えを含む、法華経の最初の14章／14品にアクセントを置いていたのに、日蓮は、そのように、永遠のブッダの見象的な顕現を扱う、後半の14章／14品の中に〔法華経という〕書物の核心を認め、これらの最後の半分を、〝主要な門〟〔本門〕として、〝脇の門〟〔迹門〕としての最初の半分と対比する〔106―107頁〕

グンデルトによる古い天台宗の教えと日蓮の教えの対比は極めてアカデミックであって、彼は日蓮の教えを実存的に解釈していない。しかし、彼の『日本宗教史』が今から71年も前に書かれたことを思えば、それもやむを得ないであろう。『法華経』の後半の14章を、日蓮は、この書物の核心を含む部分であると認めている。彼によれば、この箇所で永遠のブッダ／久遠のブッダの具象的な顕現が扱われていることを、日蓮は重視していたことになる。法華経のブッダは歴史上の人物あるいは生身のブッダではない。永遠のブッダが、この地上に現われて生きとし生けるものを救うために法を説くというのが、『法華経』そのものの教えであり、日蓮の教えは『法華経』の精神に忠実であると言えよう。永遠のブッダ／久遠仏はシャーキヤムニとしてこの地上に現われ、〝汝〟あるいは〝あなた〟として、生きものとして生存する生身の人間と向かい合う。

さて、『法華経』という一冊の書物が仏説の全真理を含むことを示唆しながら、グンデルトは『法華経』について、次のように解説する――

そして、真に真言的である法華経は、彼にとって単に真理を含んでいるだけでなく、ただ、インスピレーションを与えられているだけの書物でもなく、むしろ、この書物の中のすべての言葉は、ひとりの生身のブッダである――われわれが、ここにおいて文字を見ることに対する責任は、われわれの肉眼だけに

ある。しかし、この経（スートラ）の精髄は、聖なる題目〔御題目〕、すなわち、妙法蓮華経の五文字に要約されている〔107頁〕

グンデルトによれば、法華経という「この書物の中のすべての言葉は、ひとりの生身のブッダである」ということになる。しかし、法華経の中の「すべての言葉は、ひとりの生身のブッダである」という文句によって何が意味されているのであろうか？　この問いに、『日本宗教史』の著者は次のように答える――

かくて、聖なる題目は、永遠のブッダ、真の本性、あらゆる個別的なものをそれの核心に担っている全宇宙の最も純粋な、最も完全な現象形態に他ならない。それゆえに、それは、それから法華経が独断的な真理を得ようと欲する、あるいは、それについて瞑想しようと欲する、如何なる目的も有しない。祈りながら崇拝する信仰において、この題目を発音することだけが問題なのである〔107頁〕

法華経という「この書物のすべての言葉は、ひとりの生身のブッダである」ということは、恐らく、「聖なる題目は、永遠のブッダの最も純粋な、最も完全な現象形態に他ならない」と言い換えられるであろう。永遠のブッダの最も純粋な、最も完全な現象形態は、われわれの肉眼によって見られる。それゆえ、「われわれが、ここにおいて、文字を見ることに対する責任は、われわれの肉眼だけである」。われわれが妙法蓮華経の五文字を見ることに対する責任はわれわれの肉眼だけである。われわれは、われわれの肉眼によって妙法蓮華経の五文字、あるいは同じことだが、永遠のブッダの現象形態、すなわち、歴史上の生身のブッダを見るのである。「妙法蓮華経」の御題目は、シャーキヤムニの目覚めている状態、および全宇宙の最も純粋な、最も完全な現象形態、あるいは全宇宙の実相に他ならない。みずから自身、シャーキヤムニの完全に目覚めている状態になるためには、「南無妙法蓮華経」と題目を唱えさえすれば、それだけで十分である。そうすることによって、彼はブッダになれるのである。しかし、日蓮にとって、永遠のブッダ／久遠仏が何であるかは、どうでもいいことである。旧約聖書の神は、人間とかかわる限りにおいて、汝、あるいは、あなたである。神は人間に話しかけ、人間は、神に話しかける。イスラエルの人々は、神が何かということを全く問題にしなかった。日蓮の場合にも、グンデルトによって言われているように、永遠のブッダの現象形態は、「それから法華経が独断的な真理を得ようと欲する、あるいは、それについて瞑想しようと欲する、如何なる目的も有しない。祈りながら崇拝する信仰において、この題目を発音することだけが問題なのである」。要するに、永遠のブッダそのものに、日蓮は興味を示していないよ

うに思われる。日蓮にとって真に重要なのは、永遠のブッダと名づけられる真の存在ではなく、人間の現存あるいは生存そのものであろう。人間の生存は無常である。

日蓮は、永遠のブッダあるいは久遠仏に深い関心を示していない――このようにわたくしは解釈する。日蓮の永遠のブッダについての見解は、グンデルトの『日本宗教史』において全く示されていない。法華経という「この書物の中のすべての言葉は、ひとりの生身のブッダである」というグンデルトの解説に基づいて、わたくしは日蓮のシャーキヤムニ観を推測することを許されるであろう。法華経のシャーキヤムニは、人間の想像を絶するほど長く生き続けるけれども、彼は決して不死ではない。その限りにおいて、彼の生命は遠い未来において尽きる。永遠のブッダそのものは、日蓮にとって問題でなかったに違いない。ブッダの性質が何かという、形而上学的な問題は、日蓮にとって少しも重視されなかった。

Ⅱ．ブッダになろうとする熱望

妙法蓮華経という題目を唱えることが、日蓮の教えのハートである。「御題目を唱えることによって、善人であれ、あるいは悪人であれ、生身の人間は法華経の本質に変えられる。題目の響きは、人間の中に隠されているブッダを出現させる。その出現において、すべてのモラルも決定されている――聖なる題目の名指しされるところ、そこには、すでに浄土がある。現在において、この大地において、太陽の昇る、この国において、ブッダになることが起こる――それゆえに、あの世のパラダイスについての浄土宗のおしゃべりは、厳しく非難すべき誤謬（ごびゅう）である」〔107頁〕。日蓮の浄土宗批判は、われわれの興味をそそる。日蓮は、彼の眼差しを現象界からそらして、超越的なものへ向けなかった。彼にとって問題であったのは、彼の生きていた時代、および国であり、そして社会の現実であった。

グンデルトは、3．日蓮の教えにおいて簡明に日蓮の思想をスケッチしている。しかし、わたくしは、グンデルトの日蓮の教えを批判的に論評した。これ以上、彼の日蓮の教えについて論述する必要を、わたくしは認めない。〝末法〟あるいは〝末世〟についても、グンデルトはスケッチしている。しかし、〝末法〟に関する彼のスケッチに言及するには及ばない。グンデルトの日蓮の教えにおいて注目されるべき点は、法華経に含まれる、あらゆる言葉は生身のブッダであること、およびブッダになることは、現在において、この大地で、太陽の昇る〔日出づる〕この国で起こることに要約される。

ヨーロッパおよびアメリカにおいては、神のようになるという熱望が、人間の存在論的興味をそそると言えよう。しかし、東アジア、特に、日本においては、ブッダになろうとする熱望が、仏教徒の最高目標であろう。永遠のブッダの現象形態であるシャーキヤムニの

目覚めている状態に達することが、日蓮にとって〝ブッダになること〟であったに違いない。そして、この目標を達成する道は、妙法蓮華経の五文字を発音することに他ならない。〝南無妙法蓮華経〟と唱えることによって、生身の人間は法華経の本質に変えられる。そして「題目の響きは、人間の中に隠されているブッダを出現させる」のである。しかし、ここで、われわれによって注目されねばならないのは、他者であるシャーキャムニによって人間が救済されることではない。「題目の響きは、人間の中に隠されているブッダを出現させる」ゆえ、妙法蓮華経という御題目を唱える人間が、そうすることによって、自己自身の中に隠されているブッダを出現させ、みずからブッダになるのである。外部から与えられる永遠のブッダの助けは必要ではない。みずからの中に隠されているブッダになることによってシャーキャムニの目覚めている状態に達し、「現在において、この大地において、太陽の昇るこの國において」、人は、みずから、ブッダになるのである。生身のブッダになることが、日蓮の中心思想である。日本宗教史において、日蓮聖人ほど情熱的に〝ブッダになろうとする熱望〟を説いた宗教者は、他に存在するであろうか？

結びに代えて

グンデルトの〝日蓮の教え〟は、あまりにも簡明であるという印象を人に与えるかも知れない。しかしながら、彼の解説は、問題の核心に触れている。ある高名な、ドイツの日本学者によって刊行された書物、Japan〔Hrsg. von H. Hammitzsch, 1975, S. 164-165〕において、A・シュヴァーデは、日蓮の思想を極めてコンサイスに解説している。彼によれば、〝南無—妙法蓮華経〟が、「日蓮にとって、肉体を具えた／生身のブッダと見なされる」のである。そして「ただ、この呼びかけによってだけ、日蓮の信仰によれば、すべての人間に隠されているブッダが出現する」——このように、シュヴァーデは言う。日蓮の教えについて、シュヴァーデは、これだけしか言っていない。一九七五年に『日本』という単行本においてシュヴァーデによってなされた〝日蓮の教え〟の解説よりも、一九三五年にすでに述べられている、グンデルトの〝日蓮の教え〟の方が、遥かに優れている。一九三五年に刊行された、彼の『日本宗教史』の中の〝日蓮の教え〟について、二十一世紀においてさえ批判的に紹介する労を煩わないこと、それは、有益である——そのように、わたくしは信じる。

木を見て森を見ないことは、今や、アカデミックな流行病になっ

てしまった。学者によって好んで扱われるのは、小さくて、しかも、テクニカルなテーマだけである。そして、学者は長たらしい説明を好む。しかし、専門の視点からだけ研究するのは、決して望ましくない。過度の専門化は、人を盲目にするかも知れない。グンデルトの〝日蓮の教え〟は、われわれを盲目にすることを教えない。極めて簡明に、しかも、深い次元において、日蓮の教えが何かを、彼はわれわれに教えるからである。彼の〝日蓮の教え〟の解釈が正しいか否か、われわれは検討すべきであろう。しかしグンデルトは、専門的なデータを用いて末梢的なテーマを末梢的に扱っていない。〝日蓮の教え〟にアクセスする、彼の方法が正しいか否か、日蓮についての彼のヴィジョンが洞察に富んでいるか否か――それが問題である。われわれに求められるのは、日蓮の教えに関する知識の量ではなく、それを理解するために不可欠なヴィジョンと批判精神、そして日蓮の思想と行動に対する理解を、われわれが有するか否かであろう。